神戸女子大学文学部紀要　55巻　17－30　2022

感情の存在を表す there 構文について

南　　佑　亮

On *There*-existentials for Emotions

MINAMI Yusuke

1．はじめに

存在を表す there 構文については、分野・理論を問わず多くの研究の蓄積がある。しかし、be 動詞に後続する NP（post-verbal NP，以下 PVNP とする）に感情を表す名詞が用いられる（1）のような現象を対象に含めている研究はほとんど存在しない。

（1）There is an intense anger in Isabella.　　（Cappelle et al. 2020より抜粋）

（1）の表現には概念メタファーの一種である存在のメタファー（ontological metaphor）による動機づけがある（Lakoff and Johnson 1980: Chapter 6）。まず、PVNP 位置を占める名詞 anger は、感情経験が実体の伴う存在物として捉えられていることに加え、その存在物（特定の感情）がある容器の中に存在しているという概念化（いわゆる「容器のメタファー」）も関与している。つまり（1）は、Isabella という人物（容器）の中に激しい怒りの感情（内容物）が存在する、という概念化を反映した表現であると分析できる。

一方で、感情に関わる言語表現にかかわる概念メタファーの研究は盛んにおこなわれてきた。ただしそうした研究では、「怒り」「悲しみ」「恐怖」といった特定の感情がどのような概念メタファーを通してどのように言語的に表現されるか、という名義論（onomasiology）的な視点に立った分析が志向される傾向にある。例えば、Kövecses（2000: Chapter 2）には “anger,” “sadness,” “fear” を含む 9 つの感情に関わる概念メタファーを列挙し、それぞれのメタファーによって動機づけられている言語表現が詳細に挙げられているが、必然的に、そこには anger，sadness，fear というそれぞれの感情を直接名指す名詞が使われている表現とそうでない表現が入り混じっている。

これに対し本研究では、「特定の感情を直接指し示す名詞（anger など）が there 構文（以下「感情 there 構文」）の PVNP という位置に生起する場合に末尾の前置詞句補部にどのようなタイプの指示物が生起し、それぞれの場合の基本的意味構造はどうなっているのか」という問いを念頭に置き、関連データの妥当な分類を試みる。とりわけ、感情を表す述語動詞の意味構造の分析（Croft 1993, Pesetsky 1995）の中核をなす「感情の経験者（experiencer）や感情の原因（cause）がいかに言語化されるか」という視点が当該現象の適切な記述のためにも有効であることを中心に論じていく。その上で、当該の現象に対して構文文法理論の観点から考察を試みる。

以下、本稿の構成は以下の通りである。2 節では、本論文が扱う対象（感情 there 構文）の範囲とその調査方法について述べる。3 節では、2 節の方法で収集したデータを感情の「経験者」の具現化という基準によって感情 there 構文を 2 種類に大別し、それぞれの下位タイプの特徴について実例のサンプルとともに確認していく。4 節では、3 節で取り入れた感情 there 構文を二つに分類するという仮定の妥当性について構文文法理論の観点から議論する。最後に 5 節で結語と展望を述べる。

2．対象とする現象および調査手順

感情 there 構文の PVNP に実際に出現する感情名詞は多岐にわたるが、本研究では対象を anger, fear, sadness, comfort, consolation, satisfaction, solace の 7 つに限定した。PVNP に続く前置詞句の主要部には、筆者が把握する限り少なくとも in, about, to の 3 つの前置詞が見られるが、本研究ではその中で最も事例数も多い in の場合に限定した。[1] そして以上の条件に該当する実例を、Corpus of Contemporary American English（COCA）から採取した。具体的には、まず上記の 7 つの名詞と in が続けて生起する事例をすべて抽出したうえで、当該の名詞と in 前置詞句がそれぞれ there 構文の PVNP と場所句に対応している実例を選び出す、という手順で調査をおこなった。

3 節では、上記の手順で作成したデータベースを元に、感情 there 構文の分類と記述を試みる。

3．感情が存在する「場所」の類型

本節では、2 節の調査に基づき、感情 there 構文における「場所句」である in 前置詞句の補部の形式的・意味的な類型について詳述する。1 節で取り上げた（1）では、in 句の補部は感情の経験主体となる人（Isabella）が占めていた。（1）は Cappelle et al.（2020）による作例だが、（2）や（3）のように、このタイプの実例も確かに存在している。

（2）But there is no fear in her this morning.（COCA 2011 Fiction）
（3）There is sadness in you, though, for your children, right?（COCA 2001 Spoken）

（1）−（3）の感情 there 構文では、感情の存在する「場所」はその感情の「経験者（experiencer）」と同一視されているが、この概念化は、「感情が自分自身の内部に存在しているように感じられる」というおそらく誰にも身に覚えのある主観的体験によって動機づけられているように思われる。（1）−

（３）のように経験者が描写事態内の主要な参与者として表現される他の言語現象に、英語の心理動詞（psychological verbs）がある。心理動詞は、心理状態の経験者が主語で表現されるタイプ［＝（４ａ）］と目的語で表現されるタイプ［＝（４ｂ）］の２種類に分かれており、前者は経験者主語（Experiencer Subject）タイプ、後者は経験者目的語（Experiencer Object）タイプ、という呼称で区別される（Pesetsky 1995; 坂東・松村2001）。

（４）ａ．The children feared the story.　（坂東・松村2001: 71）
　　ｂ．The present pleased the children.　（ibid.: 72）

心理動詞が示すこの性質からの類推によって、（１）－（３）のように感情を表す名詞が PVNP を占める感情 there 構文では in 前置詞句の補部が心理動詞述語文における「経験者」に対応する、と結論づけたくなるかもしれない。しかし、事実はそれほど単純ではない。第一に、COCA から in 前置詞句を伴う感情 there 構文の実例を抽出し精査すると、in 前置詞句の補部が経験者を間接的にしか指示していない事例が認められる。もちろん、それでも経験者がそこに関与しているという点で（１）－（３）と同種のものと考えることもできるかもしれない。しかしより注目に値するのは、経験者は含まれず、経験者とはまったく異質なものが前置詞句補部を占めるような事例も観察されることである。以下、３．１節では経験者を含むタイプについて、３．２節では経験者を含まないタイプについて、それぞれ見ていくこととする。

３．１　in 前置詞句の指示対象が経験者を含むタイプ

感情 there 構文の中には、（１）－（３）のように in 前置詞句で経験者が直接指示される場合に加えて、経験者が密接に関係を結ぶ何かを指す事例がある。以下ではそれらを便宜上、経験者の身体の一部を指す場合（３．１．１）、経験者の動作や行為を表す場合（３．１．２）、経験者をその一部に含むより大きなものを指す場合（３．１．３）に分類し、それぞれの特徴を確認する。

３．１．１　「in 補部＝経験者の一部」

はじめに見ておきたいのは、in 前置詞の補部が、PVNP が指す感情の経験者の身体の一部を指す場合である。例を以下に挙げる。

（５）There was a flicker of fear in her face, which might have meant anything.（COCA 1993 Fiction）
（６）And he always had watery eyes － there was always sadness in his eyes.（COCA 2013 Magazine）

これらの例は、文字通りには、ある感情がある人物の顔（＝（５））や目（＝（６））に存在する、と述べているわけだが、「ある人の顔や目だけが感情を経験している（つまりその人自身はその感情は経験していない）」という意味ではない。（５）や（６）は、他者の感情の観察者（＝感情経験の当事者以外の人物）の視点に立った主観的な把握の反映であるといえる。例えば（６）で「目に恐怖が存在している」と述べるとき、実際は観察者が当該の人物の目を見て、その目つきから当該人物の中にある感情を認識しているのである。[2)] したがってこの表現の意味解釈には、部分（part）で全体（whole）を表すタイプのメトニミー認知が関与しているといえる（メトニミーの類型については、Radden and Kövecses 1999; Littlemore 2015等を参照）。

３．１．２「in 補部＝経験者の動作・行為」

次に、in 前置詞の補部が、PVNP が指す感情の経験者の動作や行為を指し示す場合を見る。（７）－（９）がその例である。

（７）There was a calm sadness in her voice.（COCA 2011 Magazine）
（８）Her smile was lovely and there was no fear in it.（COCA 2015 Fiction）
（９）Lee tried to console herself with the thought that at least there was no anger in his words, only weariness.（COCA 1996 Fiction）

（７）－（９）において、in 前置詞句の補部は特定の人物（経験者）の声、笑顔、発した言葉を指しており、その声、笑顔、言葉の主である人物が PVNP の指す感情を経験している（またはしていない）であろうという、感情経験の当事者以外の第三者の視点からの認識内容を表現している。これらも恣意的に生み出された表現ではなく、ある人物の声や表情や話す言葉の内容などを手掛かりとしてその人の感情の状態について推論をする、という一般的な認知活動に動機付けられていると言ってよいだろう。また、このタイプと３．１．１で見たタイプに共通するのは、前置詞句の補部の NP が経験者そのものではなくその「部分」を指すということである。すなわち、いずれのタイプも経験者が「部分－全体」のメトニミーにおける「全体」の方に相当する。

３．１．３「in 補部＝経験者がいる場所」

以下の例が示すように、in 句の補部が「場所」を表す場合がある。

（10）You’d be surprised. There’s a lot more fear in this room than you’d think.（COCA 1997 Fiction）
（11）There’s a lot of anger in the world today.（COCA 2019 Spoken）
（12）There has been much sadness in the kingdom. A wedding would raise the spirits of the people.（COCA 2000 TV）

(10)－(12) は、前置詞句が「場所」を表しているという点で、3．1．1 や 3．1．2 で見たタイプのものよりも典型的な存在の there 構文に近いように感じられるが、(10)－(12) の感情 there 構文が表す意味内容には、ある感情と「場所」に加えて、感情の経験者も関与している。例えば (10) では、恐怖を経験しているのは部屋そのものではなく、その部屋にいる人々である。したがって (10)－(12) における in 前置詞の補部は、場所によってその場所にいる人々を指示するという「部分－全体」型のメトニミーによって動機づけられている。「部分－全体」型のメトニミーが関与すること自体は 3．1．1 節や 3．1．2 節で取り上げたタイプとも共通するが、この 2 タイプとは異なり、(10)－(12) では経験者が「部分」となり、場所（つまり in 前置詞句の補部）が「全体」の方を指している。

3．2　前置詞句が経験者を指示しないタイプ

3．1 節では、in 前置詞句の補部が何らかの形で PVNP の表す感情の経験者を間接的に指示する場合を見てきたが、本節では in 前置詞句の補部が経験者を指示しない場合について見ていく。3．1 節の感情 there 構文とは異なり、本節で見る感情 there 構文は、in 前置詞句補部である名詞句が PVNP の表す感情経験をもたらす原因（cause）を表している。つまり感情経験（PVNP）と、その感情経験の原因（前置詞句補部）だけが明示的に表現され、経験者は背景化されているということである。興味深いことに、3．1 節で見たタイプと同様、前置詞句補部の指示対象の意味的特徴に応じていくつかの下位タイプに分けることができる。以下では、COCA の調査から得た実例とともにそれらのタイプを確認する。

3．2．1　潜在的な経験者による認識や行為の直接的明示

はじめに、PVNP が表す感情経験の原因となる行為や認識状態が前置詞句内で動名詞句として明示的に表現されている場合から見ていく。以下に例を挙げる。

(13) There is comfort in knowing from the circumstances that there would have been no suffering. (COCA 2016 News)

(14) I think that there's a great deal of comfort in perceiving the place you live as part of a larger system (...) (COCA 2007 News)

(15) Orchestrating a large team is daunting, but there is a deep satisfaction in working on big projects that will [be] seen by millions of people around the world. (COCA 2012 Web)[3)]

(13)－(15) の感情 there 構文は、「動名詞句で表現される動作・状態に従事すると、PVNP が表す感情経験が引き起こされる」という意味を表す。3．1 節で見た各例では、前置詞句補部は経験者や経験者を想起するモノ（経験者の一部や経験者を含む場所）を表していた。これに対し、(13)－(15) の前置詞句補部は、経験者にたいして特定の感情経験という結果（effect）をもたらす「原因（cause）」を表しているのである。[4)]

3．2．2　潜在的な経験者による認識・思考プロセスの間接的明示

次に、思考・認識を表す名詞句によってPVNPの指す感情経験の原因となる思考・認識のプロセスが暗示される場合を見てみよう。

(16) (...) there's consolation in the idea that nature is reclaiming the places it has lent to people. (COCA 2012 Magazine)

(17) (...) there is consolation in the belief that religion will ultimately triumph. (COCA 2021 Web)

(18) I was raised Catholic, but there was no comfort in the idea that Luisa was taken to heaven. (COCA 2015 Fiction)

(19) There was a strange comfort in that thought. (COCA 1994 Movie)

たとえば（18）の感情 there 構文の意味解釈は、ある特定の内容のある考え（idea）が単に実在しているだけで勝手に人に心の慰めをもたらしてくれるということではなく、人が実際にその考えを持つことで心が慰められるという因果関係が根底にある。しかしPVNPの経験者がその特定の考え（idea）を「持つ／抱く（have)」というプロセスは、強く含意されているものの、3．2．1で見た例のように直接的には表現されていない。

3．2．3「事実」のみを表現する場合

3．2．1や3．2．2で見たタイプとは異なり、前置詞句の補部では経験者による思考・認識のプロセスは言語表現から除外され、特定の事実の内容だけが言語化される場合がある。以下のような例がこれに該当する。

(20) After not having much of a chance to win the previous three games in Cleveland, there was some sliver of consolation in the fact that they could have won this one. (COCA 2016 News)

(21) There's solace in the fact that his famous clients suffer in winter, too. (COCA 2003 Magazine)

（20）や（21）は、形式上は3．2．2節の（17)－(19）に似ているが、idea, thought, belief などとは異なり、fact の意味には主体による思考・認識のプロセスが含まれない。すなわち、(20）や（21）の意味解釈は前置詞句補部が指示する「事実」を認識・把握するプロセスを前提としているが、そのプロセスは言語的に明示されていないのである。

同様のことは次のような例にも当てはまる。

（22）Nothing had changed since the last time she was here. But somehow, there was comfort in that.（COCA 2012 Fiction）

（23）I did the best job I could do, so there's some satisfaction in that.（COCA 2007 News）

（22）と（23）では前置詞句の補部は代名詞 that が用いられているが、これは直前で述べられた事実を指している。（22）の場合、that が指示するのは「以前に訪れた時から何も変わっていなかったこと」という事実であり、PVNP が表す感情状態（安心感）を経験するにはこの事実を認識することが前提条件なのは言うまでもないが、この認識のプロセス自体は言語的に明示されていない。

3．2．4　モノや属性など

ここでは、PVNP の感情状態の経験者およびその認識のプロセスが言語化されないその他のケースを見ていく。たとえば（24）では、岩という存在物（モノ）が前置詞句補部を占めている。

（24）If I were a fish, I would choose a boulder-home. There is comfort in rock. It lends solidity and permanence to a turbulent world.（COCA 1992 Magazine）

（24）の感情 there 構文（There is comfort in rock.）は、文字通りには「岩（rock）の中に安心感（comfort）が存在する」と述べているのだが、実際には岩という存在物自体の中にはいかなる感情も存在しないため、額面通りの解釈では意味を成さない。この表現が意味を成すための前提になっているのが、感情（安心感）の経験主体が「岩というものがあるお陰で安心感が得られる」という一種の因果関係を見出す概念化のプロセスなのである。（24）の感情 there 文は、そのような概念化プロセスの存在を背景に据えたうえで、あたかも岩と安心感だけが実在するかのような状況描写であるといえる。

同様のことは、以下のように前置詞句補部が属性概念を指す場合にも当てはまる。

（25）There is some comfort in the emptiness of the sea.（COCA 2003 Movie）

（26）Sir Pagan has been reading the apocrypha, the sweet, unchanging apocrypha. Eirs memories are unmoored and adrift, but the apocrypha remain the same. There is comfort in that constancy.（COCA 2014 Fiction）

（25）と（26）は、それぞれ空虚さ（emptiness）や不変性（constancy）という属性そのものの中に安心感（comfort）という感情経験が実在しているかのような描写になっているが、その背後には、経験者が当該の属性を認識することによって安心感が得られる、という因果関係を見出す概念化プロセスが関与している。

3．2．5　まとめ

3．2節では、感情 there 構文のうち、in 前置詞句補部が PVNP の表す感情経験の経験者ではなくその感情経験の原因を表すものを対象とし、意味・形式上の違いに応じた 4 つの下位タイプを概観した。その結果、経験者が背景化する点はすべてのタイプに共通するが、想定されている因果関係の成立に貢献する認知プロセスが明示的に言語化される程度に関して一定のバリエーションが見られることが確かめられた。

4．構文理論的考察

3節では、前置詞句補部の指示対象が、PVNP が指す感情の経験者（を含む）か、あるいは PVNP が指す感情の原因を表すか、という基準によって、in 前置詞句を伴う感情 there 構文を二種類に大別した。本節では、構文文法理論（Croft 2001; Fillmore et al. 1988; Goldberg 1995, 2006, 2019; Hilpert 2019等）に立脚し、この分類が英語母語話者の構文知識を記述していく上で妥当な方向を示していることを、構文交替（4．1節）と名詞の分布（4．2節）の 2 つの観点から議論する。

4．1　構文交替

3．1節で見た感情 there 構文（以下、便宜上「タイプＡ」と呼ぶ）と 3．2節で見た there 構文（以下、便宜上「タイプＢ」と呼ぶ）は、there の後に be 動詞、PVNP、そして最後に in 前置詞句が続くという、抽象的なレベルでの表層形式は同じである。したがって、ある構文Ｘがあった場合、Ｘと派生的関係にあるとされる異なる形式の構文Ｙと構文Ｘの関係よりも、Ｘと同じ表面的形式を有する構文Ｚと構文Ｘの関係の方がより広く妥当な一般化が得られるとする「表層形式による一般化の仮説（Surface Generalization Hypothesis）」（Goldberg 2002, 2006: Chapter 2；以下、SG 仮説と呼ぶ）に従うならば、このタイプＡとタイプＢが抽象的なレベルの表層形式が同じであるから、両者が単一の「構文」を成すことの実証を試みるだけでよいことになる。しかし、SG 仮説は、形式は異なるが意味的に密接な関係を持つ構文間の関連性を見えにくくしてしまうという難点があることが指摘され、いわゆる構文交替（syntactic alternations）と呼ばれてきた現象もまた話者の言語知識を構成するという考え方が登場した（Cappelle 2006）。そして近年では SG 仮説ではなく後者の考え方を支持する研究成果も報告されている（Perek 2015等）。

以上の動向を踏まえ、本稿も構文交替を言語知識の一部に含まれ得るという立場を取り、タイプＡ構文とタイプＢ構文がどのような構文と交替するのか（そもそも交替関係にある構文が存在するのか）という点を検討する。まずタイプＡに関して、以下のペアを参照されたい。

（27）ａ．There was sadness in his eyes.
　　ｂ．I saw sadness in his eyes.
（28）ａ．There was fear in her voice.
　　ｂ．I heard fear in her voice.

（27 a ）と（28 a ）はどちらもタイプＡの there 構文であるが、(27 b ）と（28 b ）のように知覚動詞を使用した他動詞文が意味的に近い関係にある。この関係は、(29）のように 2 つの構文が連続して使用されることにも表れている。

(29) There was such sadness in her eyes. I saw it in her father's eyes too. (COCA 2016 Fiction)

ある場所（人の目つきや声）の中に特定の感情が「存在する」と認めることは、つまりそのような感情を知覚するということである。交替を構成する 2 つの変異体（variants）の違いは、感情の知覚主体の言語化の仕方に帰すことができる。すなわち知覚主体を主節主語で表現するのが（ b ）であり、知覚主体は表現されず、実際の知覚主体がだれであるかは直示的解釈にゆだねる表現方法が（ a)、すなわちタイプＡの感情 there 構文なのである。[5)]

次にタイプＢを検討する。実はタイプＡと同様に、タイプＢの感情 there 構文も、PVNP を目的語とした他動詞文と密接な関係がある。ただし、動詞のタイプが異なる。以下の（30)－(32）の各ペアを参照されたい。

(30) a． There was comfort in that.
　　 b． I took/found comfort in that.
(31) a． There is consolation in knowing that ...
　　 b． I take/find consolation in knowing that ....
(32) a. There was comfort in the fact that ...
　　 b． I took/found comfort in the fact that ...

上記の 3 例が示すように、(a ）の構文（タイプＢ）は、おもに take や find を用いた他動詞文（ b ）と意味的に近い関係にある。(27）や（28）で見たタイプＡと交替関係にある文とは動詞が異なるが、これは単純なコロケーションの問題ではなく、意味の本質的な差異にかかわっている。(30)－(32）の（ b ）における他動詞文の主語は、PVNP の知覚主体ではなく、PVNP の経験者に他ならない。３．2 節で、このタイプの感情 there 構文では前置詞句補部が経験者を含まないことを見たが、この構文の変異体である（ b ）では、他動詞文の主語として経験者が明示されている。

以上のように、 2 つのタイプの感情 there 構文は、表面上の形式は共通しているように見えるが、意味は著しく異なる上に、交替関係にあると見做すことのできる構文のタイプが異なっている。

本節を締め括る前に、 2 つのタイプの違いに関する別の観点に触れておく。COCA の予備調査に基づく限り、 2 種類それぞれの構文交替における感情 there 構文のステータスも異なっている可能性がある。具体的には、(27）や（28）のタイプの交替では there 構文形式の方が他動詞文よりもトークン頻度が高く、無標の形式である可能性が高いということである。これとは対照的に、(30)－(32）のタ

イプの交替では他動詞文の方が高頻度で用いられる傾向にあり、there 構文形式の方は、何らかの理由で感情の経験主体を伏せておく動機がある場合に用いられる有標の形式である可能性がある。ただし、これらの説を実証する具体的な量的分析は将来の課題とし、本稿では予備調査に基づく見通しに言及するにとどめておく。

4．2　名詞の分布

本稿が取り入れた感情 there 構文の二分類の妥当性を支持するもう一つの間接的な証拠として、どちらのタイプの PVNP にも分布できる名詞がある一方、かなり厳密に一方にしか分布できないものもあるという事実が指摘できる。本稿が対象とした anger，fear，sadness，comfort，consolation，satisfaction，solace という 7 つの名詞だけに限ってもこのような振る舞いのバリエーションが見られる。たとえば、sadness や fear はタイプＡの事例の方がはるかに多いものの、(33) のようにタイプＢでも観察されることがある。一方、anger がタイプＢで用いられることはまずないようである。

(33) And yet there will be some sadness in closing the old place's doors. (COCA 2012 Web)

同様に、satisfaction が見られる実例はほとんどがタイプＢであるが、わずかながら (34) のようなタイプＡの例も見られる。

(34) Vespasia's silver eyebrows rose minutely, but there was satisfaction in her eyes. (COCA 1990 Fiction)

一方、comfort，consolation，solace は厳密にタイプＢに限られ、タイプＡの実例は存在しない。試しに (34) の感情 there 構文に似せて (35) のような文を作例し、タイプＡの解釈（つまり目の主が comfort の経験者となる解釈）が強制されるかどうかを母語話者に確認したところ、(35) の文において安心感を得たのは目の持ち主ではなく、あくまでこの状況を描写している主体（発話者）である、という反応であった。これは、(35) は、見かけ上は前置詞句の指示対象は人の身体部位（しかも目）になっているが、3．1．1 で取り上げたタイプＡの文としてではなく、3．2．4 で取り上げたタイプＢの文として解釈されることを強く示唆している。このように、comfort が there 構文の PVNP に生起する場合は、satisfaction の場合とは対照的に、タイプＢとしての解釈が強く選好されるようである。[6)]

(35) There was comfort in his eyes.

3 節の冒頭でも触れたが、感情を表す動詞（心理動詞）にも、経験者を主語とする項構造構文（ES 構文）と経験者を目的語とする項構造構文（EO 構文）という二つの構文が存在する。心理動詞の場合、

ES 構文と EO 構文の両方に分布できる動詞はまず存在しない。その点では、2 つの感情 there 構文は両方に分布可能な名詞が存在する分、EO 構文と ES 構文に比べて性質がやや近いということかもしれない。しかしたとえそうだとしても、かなり厳密に一方のみのタイプに引き付けられている名詞が存在することは、異なる二つのタイプの構文の実在性を支持する証拠と見做してよいだろう。

5．結語と展望

本稿は、感情 there 構文には、PVNP が表す感情の経験者が PP によって想起される場合とそれ意外の場合の 2 つのタイプが存在することを指摘し、構文文法理論の観点からこの類型化の妥当性について議論を提示した。本稿が先鞭をつけた感情 there 構文の研究は、英語の there 構文の研究および感情にかかわる言語表現の研究に対して少なからず貢献するところがある。前者については、カテゴリーの問題を投げかけている。本稿で扱った現象の存在は there 構文のカテゴリー構造にアプローチした Lakoff（1987）でも想定されておらず、網羅的な記述を意図した Huddleston and Pullum（2002）で示されている there 構文の類型にも当てはまらないものである。PVNP の定性効果（Milsark 1974, Birner and Ward 1998）など、これまでの研究で明らかにされてきた存在の there 構文についての諸特徴がどの程度まで感情 there 構文にも当てはまるのかという問題も検討する余地があるだろう。後者については、これまで動詞や形容詞で感情を表現する研究は盛んであったところに、名詞で感情経験を表現する言語現象の研究も付け加えることができるだろう。[7)]

本稿の締め括りとして、残されたいくつかの課題について述べておく。まず、量的な分析を念頭に、対象とする現象の範囲を広げることは不可欠である。2 節で述べたとおり、感情 there 構文の PVNP を占める感情名詞はかなりの数にのぼる。それぞれの名詞の分布に意味的な要因がどの程度関与しているかといった問題も含めてその全貌を明らかにするためには、さらに多くの事実を確認する必要があることは言うまでもない。[8)] また、前置詞句も本稿では in に限定したが、2 節でも触れたように、about や to が伴うこともあり、これらの場合は in の時とは微妙に振る舞いが異なることが分かっている。この違いが何に起因するのか、例えば概念メタファーの観点から説明が可能かといった問題を検討する必要があると思われる。[9)] また、本稿では扱わなかったが、タイプ A にも B にも分類が困難な以下のような例もある。

（36）There’s a lot of sadness in his lyrics.（COCA 2011 Magazin）
（37）So there’s a lot of anger in your early music.（COCA 2017 Spoken）

（36），（37）は、一見するとタイプ A に該当しそうであるが、実はそうではない。（37）の前置詞句補部の your は、anger の経験者ではなく、怒りの感じられる歌詞を作った人物にすぎない（怒れる歌詞を書いた人がその怒りの経験者とは限らない）。したがって経験者は前置詞句内には不在ということになるが、（37）はタイプ B とも言い難い。なぜなら（37）の感情 there 構文は、ある人物が作った音楽に関して、それが怒りのこもった音楽であるという「性質」について語っているだけであって、そ

の音楽を聴いた人がそのせいで怒りを経験するということを伝えているわけではない。もしそうならば（37）は感情経験の描写ではなく、前置詞句補部の指示対象に備わった属性についての描写であると分析する方が妥当かもしれない。これがいわゆる叙述類型論（益岡 2008）における属性叙述の一種であるとすれば、影山（2009）の主張するように、事象叙述とは異なる世界にあるものであるから、本稿で取り上げた 2 タイプ（事象叙述）とは特に関連付けられていないという可能性もある。こうした問題についての検討もまた、今後の重要な課題の一つである。

謝辞

本研究は科学研究費（基盤研究（C）課題番号19K00697）の助成を受けた行われたものである。本論文作成にあたり貴重なコメントを戴いた二名の匿名の査読者に感謝申し上げたい。本研究は、Minami（2021）の発表後すぐにメールで Cappelle et al.（2020）の存在を教えていただいた Bert Cappelle 氏との議論にも負うところが大きい。ここに記して感謝申し上げたい。尚、本論文の不備はすべて著者によるものである。

注

1）Cappelle et al.（2020）も（1）のように前置詞 in の場合に限定しているが、その理由は明示されていない。

2）COCA における実例の大半は目または顔であったが、このことは、人の感情を読み取る場合にもっぱら手掛かりにする身体部位が目と顔であることと密接な関係があると推測できる。

3）元データには be が抜けていたが著者の判断で補っている。

4）ある感情が原因となって特定の事態（生理学的反応）を引き起こすという意味関係を描写する場合、その原因を表すのに前置詞 in が使われる（ｉ）のような現象については、Radden（1998: 275-9）などの詳細な研究がある。

（ｉ）She trembled in fear.（Radden 1998: 275）

一方で、本稿が対象としている、前置詞 in が感情を引き起こす原因を表す現象についての体系的な研究は管見の限り見当たらない。唯一、(13)－(15) と同種の（ii）の例文が Lakoff and Johnson（1980: 31）に挙げられている。

（ii）　There is a lot of satisfaction in washing windows.（Lakoff and Johnson 1980: 31）

Lakoff and Johnson は、（ii）は行為（および状態）を容器とみなす概念メタファー（容器のメタファー）に動機づけられた表現であり、a lot of satisfaction は容器と見做された行為（＝窓の清掃）から生じてくる副産物（by-product）であるとしている。「因果関係」という概念には直接触れていないが、「副産物」は原因によって生み出される結果であると捉えることは可能であり、ここにも一種の因果関係が関与しているという直感が働くのだろうと考えられる。もちろん（ｉ）のタイプと（ii）のタイプでは異なる性質の因果関係が関与している可能性は十分あるが、本稿ではこの問題には立ち入らないことにする。

5）多くの場合は話者であるが、小説などで（27 a，b）のような文が使われると、その直前の登場人物がこの感情の知覚主体と理解されることもある。

6）例文（35）の可能な解釈についての見解は Jon-Patrick Fajardo 氏の協力により得たものである。

7）形容詞による感情表現についての認知言語学的な研究に篠原（2002，2008）がある。

8）ある語彙的要素と構文のあいだの分布や制約には、意味的な要因だけではなく事例の生起頻度という要因も関わっている（Diessel 2019）。

9）たとえば in の時は補部に人全体が来る頻度はあまり高くなく、人の身体部位や動作が来ることの方が高頻度であるが、about になると逆の状況になり、人全体を取ることが大半で、人の身体部位や動作が生じることは滅多にない。興味深いことに、about に相当する前置詞（厳密には周置詞（circumposition））が人全体を補部に取るという現象がオランダ語にも見られるようである（Bert Cappelle 氏個人談話）。

参考文献

坂東美智子・松村宏美（2001）「心理動詞と心理形容詞」影山太郎編『日英対照　動詞の意味と構文』，69-97，東京：大修館書店.

Birner, Betty J. and Gregory Ward（1998）*Information Status and Non-canonical Word Order in English*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Cappelle, Bert（2006）“Particle Placement and the Case for ‘Allostructions’.” *Constructions, Special Volume* 1, 1-28.

Cappelle, Bert, Vassil Mostrov and Fayssal Tayalati（2020）“Temperament, Tempers, and Temporality: Constructions Reveal How Speakers of French and English Conceptualize Human Properties.” *Languages in Contrast* 21, 82-111.

Croft, William（1993）“Case-Marking and the Semantics of Mental Verbs.” In James Pustejovsky（ed.）*Semantics and the Lexicon*, 55-72, Dordrecht: Springer.

Croft, William（2001）*Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*. Oxford: Oxford University Press.

Diessel, Holger（2019）*The Grammar Network: How Linguistic Structure is Shaped by Language Use*. Cambridge: Cambridge University Press.

Fillmore, Charles, Paul Kay and Mary Catherine O’Connor（1988）“Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of *let alone*.” *Language* 64: 3, 501-538.

Foolen, Ad（2012）“The Relevance of Emotion for Language and Linguistics.” In Ad Foolen, Ulrike M. Lüdtke, Timothy P. Racine and Jordan Zlatev（eds.）*Moving Ourselves, Moving Others: Motion and Emotion in Intersubjectivity, Consciousness and Language*, 347-368, Amsterdam: John Benjamins.

Goldberg, Adele E.（1995）*Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: Chicago University Press.

Goldberg, Adele E.（2002）“Surface Generalizations: An Alternative to Alternations.” *Cognitive Linguistics* 13（4）: 327-356.

Goldberg, Adele E.（2006）*Constructions at Work*. Oxford: Oxford University Press.

Goldberg, Adele E.（2019）*Explain Me This: Creativity, Competition, and the Partial Productivity of Constructions*. Princeton University Press.

Hilpert, Martin（2019）*Construction Grammar and Its Application to English, 2nd Edition*. Edinburgh: Edinburgh University Press.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum（2002）*The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

影山太郎（2009）「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』第136号，1-34.

Kövecses, Zoltán（2000）*Metaphor and Emotion: Language, Culture and Body in Human Feeling*. Cambridge: Cambridge University Press.

Lakoff, George（1987）*Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: Chicago University Press.

Lakoff, George and Mark Johnson（1980）*Metaphors We Live By*. Chicago: Chicago University Press.

Langacker, Ronald W.（2008）*Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Ofxord: Oxford University Press.

Langacker, Ronald W.（2009）*Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago: University of Chicago Press.

Littlemore, Jeanette（2015）*Metonymy: Hidden Shortcuts in Language, Thought and Communication*. Cambridge: Cambridge University Press.

益岡隆志（2008）「叙述類型論に向けて」益岡隆志編『叙述類型論』3-18, 東京：くろしお出版.

McNally, Louise（2011）“Existential Sentences.” In Klaus von Heusinger, Claudia Maienborn and Paul Portner（eds.）*Semantics: An International Handbook of Natural Language Meaning, Vol. 2*, 1829-1848, The Hague: de Gruyter.

Milsark, Gary（1974）*Existential Sentences in English*, Doctoral dissertation, MIT. [Published by Garland, New York, 1979]

Minami, Yusuke（2021）“On ‘Noun Sensitivity’ of the *There/Have* Alternation.” Paper presented at the 11th International Conference on Construction Grammar, August 20.

Perek, Florent（2015）*Argument Structure in Usage-Based Construction Grammar*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Pesetsky, David（1995）*Zero Syntax: Experiencers and Cascades*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.

Radden, Günter（1998）“The Conceptualization of Emotional Causality by Means of Prepositional Phrases.” In Angeliki Athanasiadou and Elżabieta Tabakowska（eds.）*Speaking of Emotions: Conceptualization and Expression*, 273-294, Berlin: Mouton de Gruyter.

Radden, Günter and Zoltán Kövecses（1999）“Toward a Theory of Metonymy.” In Klaus-Uwe Panther and Günter Radden（eds.）*Metonymy in Language and Thought*, 17-59, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

篠原俊吾（2002）「『悲しさ』『さびしさ』はどこにあるのか―形容詞文の事態把握との中核をめぐって」西村義樹編『認知言語学 I: 事象構造』, 261-284, 東京：東京大学出版会.

篠原俊吾（2008）「相互作用と形容詞」森雄一・西村義樹・山田進・米山三明編『ことばのダイナミズム』, 89-104, 東京：くろしお出版.

コーパス

Davies, Mark（2008-）*The Corpus of Contemporary American English (COCA): 560 million words, 1990-present*. Available online at https://corpus.byu.edu/coca/.